

P.1・チャナッカレ大学と学術交流協定を締結
 ・「(仮称) 四日市公害と環境未来館」との連携協定を締結
 ・「みえリーディング産業展 2014」で人材ニーズ調査

P.2・四日市市富田地区十四川の水質調査を実施
 ・鳥羽の中心地で地域振興を考える
 ・「四日市学シンポジウム 2014」を開催

P.3・サンタ列車で地域の子供たちとふれあい
 ・「こども四日市」にサポートスタッフとして参加
 ・四日市市川島地区「里山フェスタ」に参画
 ・中国天津市環境保護局・科学研究院訪問者と交流

P.4・伊勢神宮周辺での観光者行動調査
 ・鈴鹿山脈ブナ林調査地を再訪問

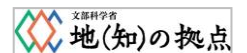
チャナッカレ大学と学術交流協定を締結

四日市大学とチャナッカレ・オンセキズ・マルト大学（トルコ共和国）は、学術及び教育における交流をより深めることを目的とし学術交流協定を締結した。チャナッカレ大学は 1992年に設立されたトルコの国立大学で、日本語教育学科を設置しており、日本語教師養成を行うなど、日本との交流も深い。本協定の締結により、学術交流や学生交流などを行っていく。



「(仮称) 四日市公害と環境未来館」との連携協定を締結

10月28日(火)、今年3月に開館を予定する「(仮称) 四日市公害と環境未来館」の活用に関する連携協定を四日市市と締結するため、四日市市役所にて調印式が執り行われた。



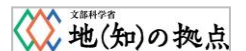
「(仮称) 四日市公害と環境未来館」は、未来に豊かな環境を引き継ぐため、四日市公害の歴史を風化させず、環境改善のまちづくりと産業発展の中で得た知識と経験を国内外に広く情報発信することを目的に設置される。本協定により、教育研究機関との連携を推し進め、施設機能の強化を図ると共に、大学の教育研究機能の充実を図ることが期待されている。

今後は、環境教育における施設の活用、環境学習プログラムや教材の共同開発、環境教育における講師の相互派遣、公害や環境に関する研究などに関する資料、情報の相互利用などを行う。本学の他、名古屋大学大学院環境学研究科、三重大学、鈴鹿工業高等専門学校が同時に四日市市との協定締結を行った。



「みえリーディング産業展 2014」で人材ニーズ調査

11月14日(金)と15日(土)の両日、三重県の多様な企業が一堂に会し、商品・サービス・技術をPRする「みえリーディング産業展 2014」が四日市ドームで開催され、本学を含む



212の企業・団体が参加し、大勢の来場者で賑わった。本学は、9つの分野に区画された会場の「産学官連携ゾーン」に出展し、地域連携活動や「地(知)の拠点整備事業」に関する資料を展示した。

そして14日(金)には、本学COC事業の研究プロジェクト「三重県内主要企業における人材ニーズ調査」の研究チームによって、参加企業への聞き取り調査を行った。3年生約70名がチームを組み、ブースに足を運び調査を実施した。井岡幹博教授(環境情報学部)を代表とする本プロジェクトチームでは、今回の調査結果などを踏まえ、「学生の成長スケール」の独自開発を目指す。



四日市市富田地区十四川の水質調査を実施

11月4日(火)、武本行正教授(環境情報学部)と武本ゼミの学生たちが、「十四川を守る会」のメンバーと共に十四川の水質調査を行った。十四川は四日市市富田地区を流れる小河川で、毎年、春に綺麗な桜を咲かせる桜並木として地元の方々から親しまれている。しかし近年、上流域に住宅や飲食店などが増加してきたことで、河川水質への影響が懸念されてきた。このような状況の中、地元の要望もあり3年程前から武本教授と高橋教授が中心となって定期的に水質調査を行ってきた。

今回の調査では、河口部の豊栄橋の下、近鉄鉄橋北の水防倉庫前、東川原橋、大矢知サンシとコメリ周辺下流部、北勢バイパスの上流部の田畑(東ソー物流の横)の5地点で測定を実施。各地点での河川流速やEC(電気伝導度)、溶存酸素量 DO(水中の酸素濃度)などを測定し、採取した水を大学に持ち帰って分析を行った。

その結果、今年の河川水量はやや少なかったものの、化学的酸素要求量(COD)などの値は良好で、河川の水質は比較的良い状況であることが判明した。



鳥羽の中心地で地域振興を考える

11月15日(土)と16日(日)の両日、総合政策学部で『コミュニティ論』を受講している学生16名が、鳥羽市の中心市街地で合宿を行った。これは、三重県庁の南部地域活性化局が取り組んでいる集落支援事業の取り組みの一つ。学生たちは、今年度から2か年にわたり、鳥羽市の中心市街地で持続可能な生活が送れるように、地域の活性化・振興策を住民と共に考えていくことになる。

合宿では、初日よりフィールドワークと地域住民との意見交換を行い、まとめ作業を経てからは、夜の市街地の調査へ繰り出すなどハードワークをこなした。そして2日目には、グループに分かれ、昼夜のまち探索や地域住民との意見交換で、気づいた課題やその解決のための提案を整理し、地域住民の方々へ発表を行った。

発表会では、「案内看板の整備」「日和山の眺望をPRする」といったものから「鳥羽城跡をイルミネーションで飾る」「妙慶川が志摩の国と伊勢の国の境だったことを活かして綱引きイベントを行う」など、街の魅力を発信するユニークな提案がいくつも出された。地域住民の方々にとっては、学生たちと共に、地域の課題やその解決方法を真剣に考えることが、「地域のために自分たちに何が出来るかを考える」、そんな一つの契機になったのではないかと感じられた。今後も学生たちの精力的な活動に期待をしたい。

「四日市学シンポジウム2014」を開催

12月5日(金)、四日市大学四日市学研究会主催による「四日市学シンポジウム2014」が開催され、学内外から約130名が参加した。今年で9回目を迎える今回のテーマは、「四日市コンビナートの明日を考える」。

冒頭に、東京大学大学院総合文化研究科院生の鎌倉夏来氏が「四日市市における工場の立地履歴と機能変化」、三重県産業支援センター理事長の山川進氏が「産業集積を活用した産業立地政策について」というテーマにて基調講演が行われた。

続くパネルディスカッションでは、パネリストに三重銀総研調査部の別府孝文氏なども加わり、国際化・産業展開・防災について聴衆を交えての公開討論を行った。近年は、燃料電池、環境産業、メディカル産業など新たな産業展開も進められつつあるとの報告もあるなど、これからも地域の核として、四日市コンビナートにはさらなる発展が期待されている。



サンタ列車で地域の子供たちとふれあい

12月20日(土)、今年も三岐鉄道北勢線で「サンタ列車」を運行した。クリスマスモードに装飾された車内で、サンタクロースに扮した総合政策学部の学生たちが、子供たちにお菓子や風船をプレゼントした。

地域路線の北勢線を支援する目的で始まり、総合政策学部の「鉄道とまちづくり」の授業の一環として、三岐鉄道の全面的な協力を受け実現している人気のイベントである。西桑名駅では、沿線市町のご当地キャラクターが出迎え、集まった乗客と記念撮影を行うなどイベントを大いに盛り上げた。



「こども四日市」にサポートスタッフとして参加

11月1日(土)と2日(日)の両日、四日市市のすわ公園交流館で開催された「こども四日市」に、経済学部の富田ゼミ、岡ゼミ、鶴田ゼミの2年生が多数参加した。この催しは“こども”が主役であり、お店を出す(お店を出すこどもを「親方」と呼ぶ)、お店で働く、商品を買う、そして銀行でお金を貸す、これらすべての経済活動を“こども”たち自身で行って小さな町を形作っている。こども達は、この町でのみ使える「ヨー」という通貨を使い、マクロ経済の動きを疑似体験していく。

今回、学生たちは、お店を出す“こども親方”のサポートスタッフとして、料理を作り販売をしたり、ハローワークに求人を出しに行ったりと、こども達の手助けを担った。学生たちにとっても、現実の経済や経営における問題解決策などに役立つヒントを得ることができた貴重な経験となった。

四日市市川島地区「里山フェスタ」に参画



12月6日(土)、総合政策学部の松井ゼミの3年生と4年生の18名が「里山フェスタ」へ参加した。このイベントは、美しい里山を楽しんで欲しいとの思いから企画され、「若い人にもっと地域活動に参加してもらう」ことを目的に行われている。当日は、雪が舞う寒さにも関わらず、地域の子どもたちが多数遊びに訪れ、学生たちが企画したレクリエーションなどで大いに楽しんだ。大勢の大学生の参加はとてもインパクトがあったようで、地域の方々からも大いに感謝され、学生たちにとっても、地域を見直す契機になった。

地域コミュニティは、防災、福祉、子育てなど、市民生活に重要な役割を果たす場であり、身近な地域を学びのフィールドとする事は、「地域」を学ぶ学生たちにとっては、学びの理解を深める上で極めて重要な活動である。松井ゼミでは、川島地区まちづくり協議会と「協創ラボ」の提携を行っており、今後も地域活動と若者というテーマを深め、少子高齢化の進む地域の様々な課題とどう向き合っていくかがこれからのテーマです。

中国天津市環境保護局・科学研究院訪問者と交流

10月28日(火)、国際環境技術移転センター(ICETT)の「天津セミナー国内受け入れ研修」事業により、天津市環境保護局の大気の担当者、監察総隊や科学研究院のエンジニアら4名が来日し、ICETTにて大気汚染対策の総括討議が行われた。討議では、中国の大気汚染に関する現状報告の後、武本行正教授(環境情報学部)を交えてのディスカッションが行われた。中国政府は、大気汚染防止条例を制定するなどし、SO_x(硫黄酸化物)の排出量は徐々に低下してきてはいるが、NO_x(窒素酸化物)対策は進んでおらず、煤塵・PMは今なお増え続けており、北京市と天津市周辺の煙源対策が喫緊の課題であるとの見解が示された。武本教授は「有意義な話が聞けた。中国では環境改善への取り組みのプライオリティが着実に上がりつつある」と感想を述べた。日本での滞在中、一行は四日市市長・議長を表敬訪問、四日市市内のコンビナート企業や大気測定局等も見学した。

伊勢神宮周辺での観光者行動調査

11月1日(土)と2日(日)の両日、総合政策学部の友原ゼミの2年生と3年生の9名が、若年女性観光者を対象としたアンケート調査を伊勢市内で実施した。近年、「女子旅」や「パワースポット観光」などが注目される中、伊勢神宮周辺を訪問した若年女性観光者の観光行動を調べ、どのような特徴や傾向が見られるかを明らかにすることが今回の調査の狙い。学生たちは、アンケートの作成方法、論文講読、ガイドブック研究など入念に下準備を行い調査に臨んだ。

フィールドワーク当日、学生たちは3つのグループに分かれ、内宮周辺と外宮周辺にてアンケート調査を開始した。途中、豪雨に襲われたり、全日本大学駅伝の開催と重なり群集で身動きがとれなくなったりと苦労は絶えなかったが、学生たちは粘り強く調査をやり遂げ、2日間で123名のアンケートを得ることができた。

そして、12月7日(日)に大阪府立大学で開催された「第29回日本観光研究学会全国大会」の学生ポスターセッションで「伊勢市における女子旅の特徴」というテーマで今回の調査結果についてポスター発表を行った。ポスター発表には、10大学・大学院の36グループが参加し、多くの方々から評価や建設的な意見が出された。

今後は、ゼミ生各人が一連の研究成果をレポートにまとめ、それらをゼミ内で議論していく。



鈴鹿山脈ブナ林調査地を再訪問

鈴鹿山脈の朝明川源流部の標高730m~1100mの一带には、面積にして約21.5ha、個体数にして3300本を超える立派なブナ林が存在する。ブナ林は水源涵養林として、また多様な生態系を育む森として重要であるが、冷涼な気候を好むため、昨今の地球温暖化による気温上昇による衰退が危惧されている。

四日市大学自然環境教育研究会と千葉賢教授(環境情報学部)を中心とした環境情報学部の学生有志は、「三泗自然に親しむ会」と共同で2011年より3年間をかけ、毎木調査を実施するなどして、ブナ林の保全活動を行ってきた。これまでに19回延べ292名が現地に入り、先日は、地元自治体の菰野町役場にて菰野・朝明川源流域のブナ林についての調査結果を、石原正敬町長へ報告する様子が中日新聞に取り上げられるなど、精力的な活動を続けている。調査はあと数年続け、来年度にはブナの遺伝子の調査に取り掛かる予定。

そのような状況の中、NHKからブナの保全活動に関する取材の依頼があり、11月9日(日)に、取材関係者と共に調査地の再訪問を行った。当日は小雨が降るなど天候に恵まれず、標高800m付近のブナ林の下限地帯にて番組収録を行うことになった。

この様子は、夕方のテレビニュース「ホットイブニング」の中で、若者が自然環境の保全に取り組む活動として紹介され、名古屋で開催された「持続可能な開発のための教育(ESD)に関するユネスコ世界会議」の様子と合わせて放送された。



これまでのPick Up Topicsはホームページでご覧いただけます。

<http://www.yokkaichi-u.ac.jp/examinee/topic.html>



「四日市大学 入試広報室(YokkaichiU)」
入試情報や最新のニュースを掲載しています。

学校法人 暁学園 四日市大学

【発行】入試広報室

〒512-8512 三重県四日市市萱生町1200

TEL:059-365-6711 FAX:059-365-6630

<http://www.yokkaichi-u.ac.jp/>

<http://smile.yokkaichi-u.ac.jp/> (受験生サイト)

